

ヨーロッパにおける世界遺産教育

Dr. Leo Schmidt¹⁾

所属1) ブランデンブルグ工科大学コットブス校

1 はじめに

私はヨーロッパにおける世界遺産教育についてお話をしたいと思います。最初に世界遺産条約について少し触れます。1972年の世界遺産条約はユネスコの最も成功したプロジェクトとしてしばしば称賛され、素晴らしい結果をもたらしてきました。すでに1000件以上が世界遺産リストに搭載されました。文化、自然、そして複合遺産もあります。世界遺産は訪問者、国内外の旅行者にとっては非常に魅力的なものです。同時に雇用を生み出し、経済発展にも寄与しています。これらの成功は結果的に政治家にとっても非常に良い動機づけとなっており、世界遺産への推薦や、候補地を支持する動きも多くの国で見られます。

2 世界遺産の課題

世界遺産登録と課題

世界遺産の基準はこの40年間で、大きく広がりました。初期の遺産は個々の建物、例えば典型的な記念物が多かったわけですが、現在では非常に複雑になってきています。特に興味深いのは、国境を越えた複数の遺産で、様々な視点から遺産がとりあげられるようになってきました。そして、“Filling the Gaps”という世界遺産リストの偏りを埋めるための取り組みが行われてきました。これまで軽視あるいは無視されてきたものに対する新たな遺産登録への進展がありました。その過程で、専門家、政治家がOUV（顕著な普遍的価値）に大変注目するようになったわけです。同時に推薦書においても幅広い基準への要求が高まってきました。初期の登録は非常にわかりやすく処理も速やかに進みましたが、当時の推薦書は今日に比べますと基本的な内容のみの簡単なものでした。じつは、推薦書を準備して申請するのは大変な作業です。専門家、研究者らのチームによって、何年もかかってまとめます。500ページ以上のものも多く、広範な議論が行われます。OUV（顕著な普遍的価値）だけでなく、真実性（authenticity）、完全性（integrity）、範囲についても議論し、比較分析も行います。緩衝地帯とマネジメントプランも議論します。重要な要素として考慮しなければならないのはコミュニティの関与です。同時に、潜在的にOUVの脅威になるような要因についても検討されます。そして推薦書を準備するためには様々なレベルで外交交渉も行われます。世界遺産リストへの申請のためには、自らに課せられる義務もあります。申請する提案国には、保護、保全、管理などの義務があるのです。

このような偉大な世界遺産のストーリーには予想されてなかった事態もありました。実際にはユネスコが認める世界遺産なのですが、一般市民や政治家が世界遺産を認めることが重要だ、と考えられる傾向にあります。世界遺産条約の最初には、自分たちの国の遺産を個々の国々がしっかりと管理していかなければいけないと書かれています。しかし、世界遺産の称号は実は世界遺産以外の「遺産」を見劣りさせてしまっているおそれもあります。世界遺産以外の「遺産」は非常に多く、例えば130万もの歴史的な建造物があります。ドイツでは39箇所の世界遺産に公的資金を多く使っていますが、これらの金額はそれ以外の「遺産」よりはるかに多く、例えば2009年から2014年の5年間で連邦資金の2億2千万ユーロをドイツの世界遺産の修復あるいは観光のプレゼンテーションに使っています。このような大きなお金が世界遺産の維持管理に使われているわけです。

もう一つの問題は、意思決定の正式なプロセスに非常に強く関わることです。世界遺産委員会による意思決定はIUCN、イコモス（ICOMOS）といった諮問団体の推薦に必ずしも忠実に従っていません。場合によっては保護や管理の重要な問題が解決されないまま登

録されている場合もあり危険です。世界遺産は一部の人からは商品と見られていて、意図的にそれを生み出して、短い期間に消費し、完全に使い切ってしまう。最悪の場合には経済的な利益に見合わなくて放棄してしまうことすら考えられます。

専門家養成の必要性

文化遺産、自然遺産に限らずこのような世界遺産の問題を解決していくためには世界中に多くの専門家が 필요합니다。課題としては、価値について、つまり、そもそも「価値」とはいったい何か、どのような価値があるのか、誰にとって価値があるのか、それはなぜなのかという議論が必要です。また、自然、文化、有形、無形の遺産の研究、記録の問題もあります。社会的な側面としてはコミュニティの関与があります。登録の影響を直接受けるコミュニティの関与も必要です。さらに国や地方行政との連携も必要です。また技術的な評価もあります。物理的な修復、建築的な修復や修理もあります。さらに考えなくてはいけないのは遺産の管理や観光のコンセプトです。また非常に大きな領域として解釈とコミュニケーションがあります。来訪者に遺産の内容をよく理解してもらうためのプレゼンテーションです。これを通じて、旅行者が学習できることが重要です。もう一つの大きな領域としては、変化に対する管理があります。短期的かもしれないし、微細であるかもしれませんが、実際に遺産を保存する時には常に変化がおきます。遺産を継続して維持していくためにも変化を管理することは重要です。この遺産の変化に対応するためには、新しいものを生み出すこと、新たなデザイン、クリエイティブなプロセスが必要になります。そしてクリエイティブな人たち、アーティスト、建築家が集合し、この分野で貢献することが重要です。

以上をみても非常に多くの作業があることがわかります。遺産の管理はチームが行い、いくつかのチームのリーダーが集まる必要もありますし、推薦書には管理の構想が必要です。また幅広い作業を国際的な、あるいは国内の機関と連携して実行することも重要です。この過程には多様なバックグラウンドを持った専門家（建築家、考古学者、美術歴史家、それから人類学者、生物学者、地質学者、地理学者こういった人たち）だけでなく、経済、法律、管理、観光学などの専門家も必要です。遺産が商品化されるのではなく、遺産の周辺で展開する様々な活動に焦点を当てるようにしていかななくてはなりません。

3 世界遺産教育

バーミンガム大学（イギリス）

それではヨーロッパでの実際の世界遺産教育の概要をお話します。

4つの大学に焦点をあてていきます。具体的なプログラムを私が設立したものを含んでいます。バーミンガム、ダブリン、トリノこれはイタリアであります、それから私の教えている所、ドイツのコットブスもあります。

さて、イギリスですけれども世界遺産に関しては長い歴史があります。バーミンガム大学の新しいコースでは MA と世界遺産に関する修士号が取得できます。素晴らしいコースです。多くの活動の蓄積がある団体に関わっています。イングリッシュヘリテージ、ヒストリックスコットランド、これら双方と大学と一緒に高い基準の世界遺産の考えと実践を行っています。内容に関しては様々な内容が含まれています。まず、最初に遺産のコンセプト、コンセプトにおける批評的分析力、具体的な世界遺産の内容、その他の世界遺産との比較もあります。同時に、重要な要素である観光管理もあります。世界遺産であるアイアンブリッジ渓谷と直接的な関係もあります。アイアンブリッジは本当に素晴らしい場所ですが、このように具体的、直接的に連携できるサイトが近くにあることは非常に有効です。

ユニバーシティ・カレッジ（ダブリン、アイルランド）

次はユニバーシティ・カレッジ、ダブリンです。ここにも世界遺産管理コースがあります。何年も様々な活動を続けています。文化遺産も入っていますが、伝統的には自然遺産に焦点を当ててきました。これは非常にユニークなもので、特別なモジュールになっています。生物多様性、保全生物学、気候変動、のほかに文化的景観の持続可能な管理など

も取り入れています。

トリノ大学（イタリア）

3 つめはイタリアのトリノです。ここでは起業家になるコースも設けています。非常にユニークなプロジェクトで、経済の発展に焦点を当てています。遺産の役割を社会経済の文脈から見ているのです。トピックとしては文化の役割、特にこれを地域の零細企業、ジェンダーエコノミクスの関連で見えていきます。マネジメントは文化、管理ツールなどの観点から見えていきます。このコースは多くの外部のパートナーと連携して教えています。地域の資源は限られています。トリノにおける座学は 14 週ありますが、最初の期間は通信講座で、自宅勉強します。インターネットを活用したり、その他のリーディングを行ったりします。残りの期間は実際にキャンパスに行き勉強します。その後 3 番目の期間には大を離れて修士論文を書きます。

ブランデンブルグ工科大学（ドイツ）

4 つ目が私のいる場所、コットブスです。他の 3 つと比べても様々な特徴があります。1 つに、修士プログラムが他の 3 か所は 1 年のプログラムですが 2 年間です。そして幅広いトピックスをカバーしています。私の大学は伝統的に建築、土木、都市計画の教員がいますし、また環境研究、あるいは異文化交流の専門家がいますのでこれをベースにして講座が作られました。したがって幅広いテーマが考えられる遺産の価値、異文化間の交流や文化遺産、自然遺産、芸術と建築、遺産の保護・管理などもカバーしています。決められたカリキュラムや全ての学生が取らないといけない必修科目はありません。学生は自分たちのそれまでの勉強、あるいは関心に従って授業を選択できます。例えば無形遺産、自然遺産、マネジメントなど自分たちの好みでフォーカスできます。また、様々な研究プロジェクトが背景となっていてトピックが半期ごとに変わりますので、遺産の具体的な内容や問題について学際的なアプローチで研究する機会が提供されます。ですから学習をするということよりもむしろ特定の問題、トピックについて全体的なアプローチが可能です。

もう一つの特徴は様々な大学と協力しています。例えば筑波大学との提携がその一つです。オーストラリアのディーキン大学、ユネスコの機関とも協力しています。国際的に魅力があるということが学生の出身地からも分かると思います。ヨーロッパが中心に世界中から学生が来ています。ロシア、アメリカ、中南米、アフリカ、カメルーン、ガーナからも留学生が来ています。オーストラリア、日本からも少し来ています。また他の国、中国、インドからも来ています。2013 年はドイツ人 9 人を含む 60 人が、2014 年はドイツ人 10 人を含む 75 人が 500 人以上の出願者から選ばれました。

4 つのプログラムの 1 つの比較でありますけれども、バーミンガム、ダブリン、トリノ、それぞれ 1 年コースで、コットブスは 2 年です。EU 域外の学生はバーミンガムでは 1 万 7 千ユーロ、ダブリンは 1 万 2 千ユーロ、トリノ 8 千ユーロ、1 年コースです。しかし、大学教育がドイツでは基本的に無料ですので、コットブスは少なくとも事務費だけを請求しております。これは学生がベルリンに行きたいときに行けるような鉄道のチケットも含まれていますので、かなり価値があると思います。このように様々な面で違いがあります。

コットブスにはご覧のようにシアターもありますし、1000 人くらいの留学生がいます。世界遺産のカリキュラムも成果も期待通りでした。この修士課程で自国の遺産のことを考え、保護や管理のノウハウを見つけることができます。自分の国を出て、振り返ってみるとことも大事だと思います。

私がコットブスに来た時には色々なことを勉強し、全く想像できなかった程遺産全般への見方が変わりました。ラテンアメリカ諸国同士の比較だけではなく、例えば、コロンビアとインドを比較するのも面白いと思います。共通の問題があると気が付きます。修士課程でそれができるのが面白いと思います。

このプログラムは、私が学士のゼミをやった時に関心を持ったことがきっかけです。歴史だけではなく遺産への理解を深めたい、そのためにはもっと学際的なプログラムと多様なカリキュラムが必要だと思いました。1997 年に初めて遺産研究という概念が生まれました。そのために、どのように様々な分野を連携するかということを考えました。

私は欧州委員会で働いていて、国際機関、ユネスコとも関わりがありますが、パリで話

しをし、戦略的に教育をユネスコの世界遺産分野に取り入れる必要があると考えました。世界遺産研究、世界遺産専攻、そして組織全体のネットワークがお互いに関連しています。客員講師も色々なところから来ていますので実務的な見方ができます。このような知的な、学術的な内容と実務的なアプローチが遺産を通して交流するのは面白いと思います。

遺産と言うのは学際的な交流で、他人の文化遺産を理解することでもあります。ですから学生たちが日々交流し、お互いに学習しあうことが良いと思います。それぞれの背景から話題を提供すると、それが大変ユニークな経験になります。

このプログラムを修了したあとは色々な可能性があります。中には、ユネスコの仕事に就く人もいます。ユネスコが何をやっているか知っていますから、即戦力になれます。また、学生が自分の国の外務省に入って、世界的な文化に関する考えを政策に導入することができます。そのほか、多くの学生は遺跡の管理に携わります。

例えば、建造物をまもりたい、具体的な踊りや音楽を広めたい、景観を保護したい、コミュニティをサポートしたい、人々の生活を変えたいなどさまざまな人がいると思います。どのような職業であろうとすべてをつないでいるのは、何か違うことをしたいというモチベーションだと思います。

ヘルワン大学（エジプト）

これは新しいアプローチで共同の修士課程です。カイロのヘルワン大学と共同の遺産の保存管理についてのプログラムです。考古遺跡の保存管理、観光管理への応用が研究されています。エジプトには貴重な考古遺跡が沢山あり、適切な管理が必要とされているので、この講座をエジプトの同僚と一緒に立ち上げました。ドイツの外務省とドイツ考古学研究所がスポンサーとなっています。まず、1年目は2人の学生がドイツのブランデンブルグ工科大学とカイロのヘルワン大学で別々に勉強します。2年目は全員ドイツのコットブスに来ます。そして3年目は全員カイロに行きます。それぞれの大学に特徴があります。例えば、カイロの人たちは観光管理を得意としています。そして4年目は別々に個々の論文を書きます。コットブスカカイロか、場所は自由に選択できます。統合されたコースでお互い学習しあえますし、またカイロの専門家から学んで、相互に学習できますので素晴らしい提携だと思います。

4 おわりに

世界遺産の教育は重要ですし成長市場です。研究・教育の多くのチャンスそれぞれの大学に提供します。世界遺産はこれからも増え続けますから、新しい仕事も増えると思います。培ったノウハウは世界遺産の現場だけではなく、様々な場所でも必要とされます。つまり世界遺産という称号がついていなくても重要な遺跡は他にもたくさんあり、同じノウハウが求められています。世界遺産では高い水準が要求されますが、世界遺産以外の場所にも影響を与えるはずで、中でも観光に魅力的な場所では、それが必要になると思います。遺産を単なる経済的な理由で消費する商品としてではなく、文化的なアイデンティティを促進する手段として使わなければなりません。遺産は個人的な誇りであり、自信の源ですが、同時にそれぞれの政治的、文化的な認識を高め、理解する手段でもあります。その先には持続可能な開発があります。国際的な協力の機会、新しい時代を担う遺産の専門家を訓練する大学との交流をする機会も沢山あると思います。